

メキシコにグズマン博士を訪ねて

筑波大学生物資源学類 糟谷 大河

2005年4月23日から30日にかけて、メキシコ合衆国に滞在し、メキシコ国立生態学研究所(Instituto de Ecología, A.C.: 図1)を訪問することができた。ここには、幻覚きのこ研究で世界的に有名な、グズマン博士(Dr. Gastón Guzmán)が名誉研究員として在籍されている。グズマン博士とは、わたしが高校生の頃から交流があり、2001年にグズマン博士が来日された折に、東京で初めてお会いすることができた。その後もグズマン博士とは、標本のやりとりをしたり、共著で論文執筆をしたり、手紙や電子メールで論文の査読をお願いしたりと、腹菌類やハラタケ類の分類について数々のご指導を受けていたが、今回のメキシコ訪問で、わたしはグズマン博士と4年ぶりに再会することになった。

首都から東 250km・1500mの高地に

今回訪問した国立生態学研究所は、ベラクルス(Veracruz)州の州都ハラ



図1 メキシコ国立生態学研究所

パ(Xalapa)市の郊外にある。ベラクルス州はメキシコ湾岸に位置する南北に細長い州で、ハラパ市は州のほぼ中央、標高1,500mほどの高原地帯にある。ハラパへは、メキシコシティから東に約250km、バスで5時間ほどかけて到着する。ハラパの街は、カテドラル(カトリック教会)とセントロ(公園)を中心にベラクルス州政府、市役所などの行政機関が集まり、その周囲に市街地が放射状に広がっている。このあたりは、メキシコ湾からの暖かく湿った風が年中吹き付けるため、標高1,500mにも関わらず、亜熱帯性の気候である。サボテンやリュウゼツランばかりが生え、荒涼とした乾燥地が広がるメキシコ内陸部から、街中に緑や鳥のさえずりがあふれ、蒸し暑いハラパにやってくると、なぜか生き返った気になる。セントロに植えられた紫色の花を咲かせた木々の樹幹には、ティランジアと呼ばれる着生植物の仲間が至る所に生えており、いかにも中米の亜熱帯らしい雰囲気醸し出していた。ティランジアは日本ではエアープランツなどと呼ばれ、園芸店でもよく見かける植物である。

セントロの前からバスに乗って20分ほど、郊外の鬱蒼とした照葉樹林の中に、国立生態学研究所は建っていた。研究所には動物学、植物学、菌学の研究部門があり、多数の生態学者や分類学者が日夜、研究をおこなっている。また、研究所には植物標本館、植物園、ラン園などが併設されており、植物園

は一般にも開放されているため、日中はハラパ市民の憩いの場にもなっているようであった。菌学部門には、グズマン博士のほかに、モエギタケ科とテングタケ科を専門とする、2名の若手のきのこ分類学者が在籍していた。さらに、菌類標本庫には、標本管理専門のキュレーターが1名配置されていた。日本では、標本管理が分類学者の大切な仕事になっており、自身の研究よりも、標本管理に時間も予算も割かれている現状があるが、ここでは、ベテランのキュレーターが適切に標本管理をおこなっているおかげで、研究者は純粋に研究に没頭できるということだった。

今もなお精力的に研究を

グズマン博士は1984年から生態学研究所に在職され、1988年に定年退職された後も、名誉研究員として、平日はほぼ毎日、研究所の2階にある標本庫の隣室で、きのこの研究を続けておられる。わたしが研究所を訪問した日も、アルゼンチン産のシビレタケ属菌の標本を検討している最中であった。久々に再会したグズマン博士は、70歳を超える年齢ながら、精力的にフィールドワークや学会発表をしておられるそうで、4年前にお会いしたときと同様、お元気なご様子だった。研究室には、膨大な菌学雑誌のバックナンバーや、菌学関係の書籍が揃っているほか、小林義雄博士から贈呈されたという、日本菌学会の手ぬぐいも飾られていた。また、グズマン博士のライフワークである、民俗菌類学的な資料も豊富に並んでおり、特に古代アステカ文明のきのこ石に関する資料は圧巻である。日本でも有名なきのこ石は、現物はスイスの博物館に収蔵されており、千葉県立中央博物館でも複製

品を見ることができる。しかし、グズマン博士の研究室には、グアテマラから出土した小型のきのこ石の現物が保管されていた。グズマン博士によれば、このきのこ石は、グアテマラのインディオに伝わっていたものを、博士が若い頃に先住民から譲り受けたものだそうで、ベニテングタケをモチーフにしたようであった。わたしが、きのこ石を片手に持つ博士の写真をお撮りした際、「きのこ石はわたしの息子です」と言われていたように、グズマン博士にとって、きのこ石は、菌学者としての様々な思いが詰まった、まさに息子のような存在なのであろう(図2)。

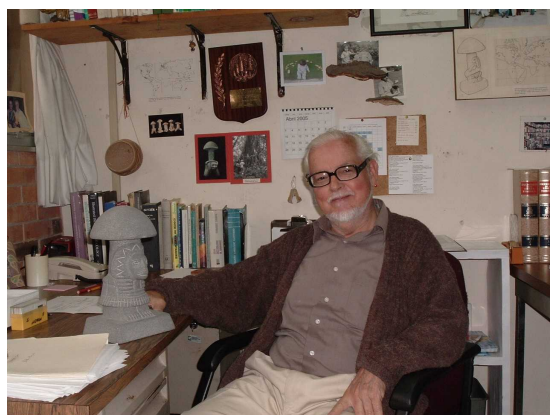


図2 研究室でのグズマン博士。きのこ石とともに

研究室でしばし歓談した後、グズマン博士のご配慮で、わたしは研究所の菌類標本庫を見学し、腹菌類標本の観察をすることができた。標本庫には、きのこ類を中心に約15,000点の菌類標本が収蔵されていた。グズマン博士によれば、高温多湿のハラパの地で菌類標本を良好な状態で保存するのは至難の業であるが、プロのキュレーターが標本庫の状態を毎日チェックし、湿度や温度などを適切に調整しているため、これまで標本に大きな損傷もなく、今ではメキシコ国内では有数の

規模の菌類標本庫になったそうである。さて、メキシコは日本の反対側に位置するというだけあって、日本には見られない、様々な興味深い腹菌類の標本を観察することができた。特に乾燥地に発生する *Mycenastrum corium* Desv.(図 3)の、角状突起を持った *Mycenastrum*-type の弾糸を初めて見る事ができたほか、中米のコスタリカとメキシコにのみ分布する *Ligiella rodoriguesiana* Sañez というアカカゴタケ科のきのこ(図 4)の標本を観察できたのは感激であった。その他、主にメキシコ北部の砂漠地帯から採集された多様なケシボウズタケ科のきのこや、草地に発生するノウタケ属のきのこなど、これまで文献では見たことがあっても、実際には目にしたことのない腹菌類が山のように現れ、多少興奮しつつ写真を撮り、顕微鏡でじっくりと観察した。また、わたしが腹菌類の研究を志した高校生の頃に、グズマン博士にお送りした埼玉県産のニセショウロ属菌の標本が、日本から遠く離れた異国の地で、きちんと標本番号を与えられて収蔵されていたのには、感慨深いものがあった。

継続研究・基礎教育重視の国

グズマン博士を中心とする研究グループには、現在、シビレタケ属菌などのハラタケ類の分類を専門とする、ポスドクの学生さんが 3 名所属している。国立の研究機関に菌学部門があり、さらに、そこにきのこの分類学者が 3 名も配置されているということもうらやましいことだが、きのこの分類を志す若い人たちがきちんと育っているということも、うらやましい限りである。メキシコでは、分類学や菌学に関する基礎教育が重視されているのか、いずれの学生さんにも共通し



図 3 *Mycenastrum corium* Desv.の乾燥標本



図 4 *Ligiella rodoriguesiana* Sañez の乾燥標本

て言えることだが、ある程度、菌類全体の分類の基礎に通じていたのが印象的だった。わたしが彼らに「腹菌類、特にホコリタケ類の分類を研究しています」と自己紹介したところ、シビレタケ属菌が専門だという一人の学生さんから、「あなたは *Arachnion album* Schw.(シロクモノコタケ)という菌を知っていますか？この種が属するクモノコタケ科(Arachniaceae)と、よく似たホコリタケ科はどこで区別するのですか？」と質問されたのには驚いた。これは、ホコリタケ類の分類を多少かじった者なら、どこかで一度は浮かぶ疑問である。しかし日本では、分類学者は自分の専門領域に固執し、専門外の分類群に関する知識が乏

しいことが多い。これはよく言えば、分類学者間の競争を回避し、うまく棲み分けているということになるのだろうが、分類学の世界の活性化を妨げているひとつの要因とも言えるだろう。継続研究重視、基礎教育重視という思想は、日本でも、これから見習っていく必要があるのではないか。

優雅で余裕のある生活リズム

さて、メキシコはラテン民族の国である。もともとはシエスタの習慣があり、今では昼寝こそしないが、その影響で午後3時前になると、研究所の研究者や学生さんたちも帰宅の準備を始める。メキシコの人々は、朝は午前8時前には出勤し、昼は午後1時頃まで仕事や勉強をしている。1時頃から2時過ぎまで、ゆっくりと昼食をとり、昼食が終わると仕事の後かたづけをして、3時前には帰宅してしまう。帰宅した後は、宵の口まで、家やセントロで絵を描いたり、楽器の演奏をしたりと、のんびりと過ごしている。メキシコの人々の日常生活は、常に仕事や勉強に追われ、分刻みの毎日を送っている日本人から見ると、なんて優雅な、余裕のある生活リズムなんだろう、と、感心してしまう。道理で、メキシコは世界でも自殺率がトップレベルに低いのだそう。世界的なきのこの研究者であるグズマン博士も、また然り。このような優雅な日常生活を送りつつも、今でも年間10本は、きちんと論文を執筆していると言うから、ただ者ではない。グズマン博士にとって、きのことは、そして菌学の研究とは一体何なのだろうか。昼食の招待を受けたグズマン博士のご自宅で、その答えを伺ってみた。

グズマン博士のご自宅は、生態学研究所の近くの Zoncuantla という小さ

な集落のはずれにあった。Zoncuantla とは、アステカ時代のことばで「小さな蜂が住む場所」という意味だそうで、博士は「我が家の庭に生えた小さなシビレタケ属菌を、かつて *Psilocybe zoncuantlensis* Guzmán という学名で新種記載したんだよ」と、自慢げに語っていた。周りを林に囲まれた静かな場所にある、赤煉瓦造りの瀟洒なご自宅で、グズマン博士はイザベラ夫人と2人で暮らしておられた。3人の娘さんはすでに独立し、特に長女のローラ博士は、グズマン博士の跡を継ぎ、現在はグアダラハラ大学理学部の教授として、ハラタケ型きのこ類の系統分類学の研究に取り組んでいる。また、イザベラさんは、自宅の近所に陶芸の窯を持ち、作品の販売や個展もしているという、プロの陶芸家であった(図5)。よく手入れされた庭に面し、きのこの置物や絵画など、きのこグッズが随所にちりばめられた素敵なおオープンテラスで、イザベラさんお手製のメキシコ家庭料理に舌鼓を打った後、ご自宅の2階にある博士の書斎で歓談した。書斎には、研究所の研究室に収まりきれない文献類、過去の研究データや、ご自身の論文別刷りなどがきちんと整理され、整然と並んでいた。やわらかな4月の西日が差し込む書斎



図5 グズマン博士とイザベラ夫人・グズマン邸で

では、グズマン博士自慢のコレクションだという中米各地のお酒のひとつ、ジャマイカ産のラム酒が入ったグラスを片手に、博士のきのこ研究の動機から、菌学、そして自然史の研究に対する姿勢など、貴重なお話を伺った。

グズマン博士は、そもそも大学の学部生の頃に薬用植物の研究を志し、インディオ先住民の間に伝わる薬用植物の調査に出かけたところ、先住民のことばで、テオナナカトルと呼ばれるシビレタケ属の幻覚きのこと出会ったのが、きのこ研究を始めたきっかけであるという。グズマン博士が学生だった1950年代の前半は、インディオの間では幻覚きのこがまだまだ占いや儀式に盛んに用いられていたそうで、博士も先住民の集落に数ヶ月滞在して、その効用や服用法などに関する調査をされた際、2回ほど、ご自身でその効果を確かめたとのことである。1952年頃から本格的にメキシコのシビレタケ属菌の研究を開始し、その後、南北アメリカ大陸はもちろん、日本を含むアジア地域やヨーロッパ、オセアニアなど、世界各地でシビレタケ属菌の生物学的・民俗菌類学的な調査をするに至ったそうである。このように、グズマン博士のきのこ研究の動機には、民俗生物学的な関心が基底にあることは間違いない。そしてこのことは、今日まで一貫して変わっていないようであった。

詩的センスと科学的センス

「わたしは科学者であり、詩人でもあります」と、グズマン博士はたびたび口にしておられた。それは、自然のメカニズムを解明し、どのように解釈・応用するかという、自然に対する科学的な視点の重要性のみならず、あるがままの自然の姿を素直に受け入

れ、そこに感動や霊的な感情を見出し、自然に敬意を表すという、まさに詩的・文学的な視点の大切さを説いておられたのかもしれない。その一方で博士は、「わたしは今でも、毎年10本は菌学の論文を書いています。しかし、生態学研究所の多くの若い研究者は、毎年1本論文を書き、毎日の午前中、数時間を実験に費やすだけで、すでに自分は一人前の研究者であると錯覚しています」という厳しい指摘もしておられた。自然に対する詩的なセンスを失わず持ち続ける一方で、自然を客観的に眺め、その機能・構造を解明するという科学的なセンスを磨くことが必要なのだろう。さらに、グズマン博士は「メキシコ人の90%はカトリック教徒で、わたしの妻もカトリック教徒です。しかし、わたしはどのような宗教も信仰していません。わたしが信ずるのは自然であり、わたしにとっての神とは自然そのものです」とも言っておられた。このことばは、グズマン博士の菌学・自然史研究に対する考え方を端的に表現しているように思う。われわれは、日頃からきのこを観察し、野外に採集調査に出かけ、実験室で培養し、論文を書くためのデータをとることに躍起になっていると、しばしば、あるがままの自然の姿に感嘆し、それに対する畏怖の感情や、敬意を表すという気持ちから遠のいてしまうことがある。そのようなとき、博士が言われたこのことばは、重みを持ってわれわれの心に響くものとなるだろう。グラスを片手に静かに語るグズマン博士は、菌学者というよりも、むしろ哲学者か芸術家のように見えた。

ご一緒に写真を撮らせていただき(図6)、グズマン邸を辞してハラパ市内に戻ると、あたりはすっかり夕闇に包まれていた。相変わらず、セントロ



図 6 グズマン博士(左)と私(右). グズマン邸で

では人々がのんびりとおしゃべりをしたり、楽器を弾いたり、思い思いの時間を過ごしている。メキシコとは

実に不思議な国である。仕事や勉強はほどほどにこなし、それよりも芸術や趣味に時間を割く陽気な人々。ヨーロッパの植民地文化と、インディオの先住民文化が融合し、ゴシック様式の荘厳な教会があるかと思えば、そのそばには古代アステカ文明の神殿が残っている街並み。乾燥した砂漠から、高温多湿の亜熱帯多雨林までを擁する多様な自然環境。これら様々な要因が複雑に影響しあい、メキシコという不思議な国の風土が形成されたのだろうか。今回は1週間の短い滞在だったので、次回はもう少し時間をかけてメキシコの風土に接し、グズマン博士ともじっくりとお話をしたいものだ。

以下の書籍・会報・別刷を御寄贈頂きました（北から南へ配列）

- 上川キノコの会 会報第 21 号(2004 年 1 月 24 日発行),第 22 号(2005 年 1 月 29 日発行)
- 北海道キノコの会 No.45 号(2003 年 12 月 20 日発行)
- 日本菌学会東北支部 会報第 20 号(記念号)(2004 年 3 月 31 日発行)
- いわききのこ同好会会報 第 9 号(2004 年 3 月 31 日発行);第 10 号(2005 年 3 月 31 日発行)
- 日本特用林産振興会 「きのこアドバイザー 第 6 号」(2004 年 6 月発行);「きのこアドバイザー 第 7 号」(2004 年 12 月発行);「きのこアドバイザー 第 8 号」(2005 年 6 月発行)
- 千葉市の保護上重要な野生生物-千葉市レッドリスト- 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課(2004 年 5 月 発行)
- 神奈川キノコの会会報 26 号(2004 年 5 月 30 日 発行);27 号(2005 年 5 月 29 日 発行)
- 関西菌類談話会会報 No.25(2004 年 6 月 発行);各種行事案内
- J-FAS 日本キノコ協会 ヘテロソフィア叢書 -2 「キノコの手帳」あおの巻(2004 年 2 月 15 日発行);ヘテロソフィア叢書 -3 「キノコの手帳」あかの巻(2005 年 6 月 1 日発行);行事案内
- J-FAS ヘテロソフィアクラブ「あん」創刊号(2004 年 9 月 1 日 発行)
- 兵庫きのこ研究会会報 第 5 号(2005 年 6 月 19 日発行)
- 大分きのこの会会報「大分のきのこ」No. 36(2004 年 4 月 10 日 発行)
- 熊本きのこ会年報 平成 16 年度号(平成 17 年 7 月 発行)